

セルゲイ・ロズニツァ監督『ドンバス』論

ドキュメンタリーとフィクションの境界を巡って

伊勢まり愛

慶應義塾大学法学部政治学科4年S組 31851269

セルゲイ・ロズニツァ監督『ドンバス』論
ドキュメンタリーとフィクションの境界を巡って

伊勢まり愛

慶應義塾大学法学部政治学科4年S組 31851269

Email: ise.maria.1103@keio.jp

目次

はじめに	1
I ドンバスを巡るウクライナの現歴史	1
1. ヨーロッパへの復歸に近づいたマイダン革命	2
2. マイダン革命がドンバスに与えた影響	2
3. ドンバス地域について——地域の特色と紛争の展開——	3
(1) 炭田で栄えた政治と経済の中心地ドンバス	3
(2) ドンバス地域を巡る紛争の展開	5
II セルゲイ・ロズニツァ監督について	6
1. ロズニツァのコスモポリタンの性質	6
2. 作風とキャリア	9
III 『ドンバス』の立場	12
1. 作品内容	12
2. 受賞歴と映画批評	14
3. ドンバスを扱う他作品	15
IV 『ドンバス』の分析	17
1. ドキュメンタリーとフィクションの境界を巡る挑戦	17
2. 『ドンバス』におけるロズニツァの挑戦	18
(1) 作品内容	18
(2) 表題が表す具体性と抽象性	19
(3) 演技が示す境界	19
i. 『ドンバス』における出演者の存在	19
ii. それぞれが行う演技	20
iii. ロズニツァが求めた演技	22
おわりに	22
参考文献	23

はじめに

2022年2月24日、ロシアが特別軍事作戦と称しウクライナに軍事侵攻を行った。その発端について、塩原俊彦は、「ウクライナ戦争の発端に、ウクライナ東部のドンバス地域で2014年以降ずっとつづいている戦闘があることは間違いない」と述べている[塩原、2022: 81]。

その認識を確認するかのように日本でも2022年5月21日に緊急公開されたのが、ウクライナ人映画監督、セルゲイ・ロズニツァ監督による映画『ドンバス』(2018)である¹。同作の配給会社であるサニーフィルムによれば同作品は、「ロシアとウクライナでの戦争を理解するための“ドンバス13のレッスン”」だという²。この発言からも、この映画が、そしてドンバスという地域自体が、昨今のウクライナをめぐる状況の起因をたどる上で欠かせないことが理解できる。

本稿では、『ドンバス』において、監督が挑戦を試みたドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界的な要素を分析する。前提としてウクライナ東部のドンバス地域とはいかなる地域であるのかを確認し、現在まで続く紛争の原因について考えるためドンバス地域を巡るウクライナの歴史を取り上げる。その上で、ウクライナ人映画監督セルゲイ・ロズニツァが映画『ドンバス』にどのような想いをこめ、それを描出するためにどのような技法を用いているのかを明らかにしていく。

第一章では、ドンバス地域を巡るウクライナの歴史的な背景を述べる。その上で、昨今のロシアによるウクライナへの軍事侵攻の起因としてドンバス紛争が挙げられる理由を検討する。第二章では、ドンバス地域を描いたフィクション映画『ドンバス』を制作したウクライナ人映画監督、セルゲイ・ロズニツァの人物像理解や映画監督としてのキャリアに迫る。第三章では、『ドンバス』の作品内容及び、受賞歴について扱いながら『ドンバス』がどのような作品であるかを示す。また、ドンバスを扱う他の映画にも注目することで、セルゲイ・ロズニツァの『ドンバス』がドンバス地域を主題にする映画の中でどのような立場に位置しているのかを明らかにする。第四章では、『ドンバス』の作品内容、表題、出演者の属性と属性に依拠する演技がいかなる演技であるかに着目し、『ドンバス』内で試みられたドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界の探求がどのように行われているのかを明らかにする。

I ドンバスを巡るウクライナ現代史

ウクライナの歴史は9世紀から13世紀まで続いたキエフ公国時代にまで遡ることが出来るが、本稿では割愛し、1991年、ソビエト社会主義共和国連邦解体にともない、同共和国の構成国であったウクライナが国家として独立を果たし、現在の領域を確定して以降に限定する。

特に本章ではドンバスを巡るウクライナの歴史に焦点を当て、基本的にはマイダン革命が発生した2013年以降を取り扱う。マイダン革命の発生やそれがドンバス紛争に与えた影

響を明らかにし、その上で、昨今のロシアによるウクライナへの軍事侵攻の発端として重要視されるドンバス地域の紛争に関する記述を進める。

1. ヨーロッパへの復帰に近づいたマイダン革命

1991年のソ連解体後、ウクライナはソ連を継承したロシア連邦と共に独立国家共同体に属する一方で、EUへの加盟を目指すなど西側への志向を強めてきた。アレクサンドラ・グージョン³に従ってその経緯を簡単にまとめれば、以下のようになる。

グージョンによれば、ウクライナは地理的にヨーロッパに属す国である。加えて、政治的な観点に着目した場合も、「1995年に欧州評議会に加盟し、そこにはとくに欧州人権裁判所も含まれていることから、ヨーロッパであることは証明されている」[Goujon, 2022: 180]。1991年の独立後、ウクライナは「ヨーロッパへの復帰」の名のもと、欧州経済共同体への接近に着手した。1994年、ウクライナとEUの間でパートナーシップおよび協力協定が締結され、ウクライナは政治の民主化と経済成長を確かなものにする支援を受けることが決まった[Goujon, 2022: 140]。同年、ウクライナは北大西洋条約機構(NATO)の非加盟国を対象にした協力プログラム「平和のためのパートナーシップ」に加入している。

ウクライナとEU、ひいてはヨーロッパとの関わりを詳しく確認しておこう。2012年3月には、ヤヌコーヴィチ大統領によってEUとの連合協定が締結され略式署名に至り、2013年11月には、EUと隣国間の連合協定合意の正式調印が予定されていた[Goujon, 2022: 163]。しかし、ロシアの圧力を受けたヤヌコーヴィチ大統領が、連合協定への署名を直前になって延期した[合六, 2020: 33]。このことがウクライナの反ロシア世論を刺激し、西側の勢力が11月10日、マイダン広場に動員をかけたという[Евромайдана, 2014]。その結果、マイダン革命には、数十万人の大衆が結集した。デモ隊は、ヤヌコーヴィチ大統領が連合協定への署名を延期したことに抗議し、ヤヌコーヴィチ大統領の辞職を要求していた。[Goujon, 2022: 138]ヤヌコーヴィチ大統領がロシアに逃亡し、2月27日に親欧米派の暫定政権が成立したことでマイダン革命は終わりを迎えた⁴。マイダン革命は結果としてデモ参加者の要求が通った形となった。

マイダン革命の後にはEUとの連合協定が施行され、ウクライナとEUは政治的、経済的関係を深化させている。経済面では2016年、包括的かつ完全な自由貿易協定が始動し、EUとの取引が発展して欧州基準との統一も進み、単一市場への参入が視野に入った。[Goujon, 2022: 180]このように見て行くと、マイダン革命の参加者の意図は、十分達成されたと考えられる。

2. マイダン革命がドンバスに与えた影響

マイダン革命がドンバスに与えた影響を検討するにあたっては、マイダン革命が過激化した側面を扱うことでより明瞭になる。マイダン革命の参加者の一部が過激化した理由として、アメリカによる同革命への働き掛けがあったという見方もある。そのような見方を示

す映画に、イゴール・ロパトノク監督とオリヴァー・ストーン氏プロデュースの映画『ウクライナ・オン・ファイヤー』が挙げられる。この映画では、アメリカがマイダン革命に働きかけたとされる様子は以下のように示されている。

映画内では、アメリカが「革命のレシピ」と称して行った工作を次の三点にまとめ紹介している。一点目が NGO を通じた資金提供だ。一例を挙げるならば、米国ネオコン系のヌーランド国務次官補による送金がある。下斗米によれば、ヌーランドは米国ウクライナ人の協会講演でソ連崩壊後約 50 億ドルを NPO に支払った [下斗米, 2014: 35]。二点目に資金提供を受け設立されたメディアによって行われたウクライナ人に対するマイダン革命への参加の呼びかけである。嶋崎によると、ウクライナの hromadske tv は、オランダ大使館、アメリカ大使館、およびハンガリー出身の米投資家ジョージ・ソロス氏が設立した「ルネサンス財団」から約 250 万フリヴニャの寄付を受けていた [嶋崎, 2022: 59]。三点目は、平和的な抗議活動を一瞬にして暴力的なものに変えるテクニックである。デモに参加した人々の一部は、米国系の NGO にてこうしたテクニックの訓練経験があるという。

このように過激化が仕組まれていたともみなせるマイダン革命は、ロシアの指導層や一部のヨーロッパの専門家からは「西側の強国に支援された過激派勢力による反乱」と紹介されている [Goujon, 2022: 129]。グージョンによって「西側の強国に支援された過激派勢力」と呼ばれる人々は、マイダン革命時に、わざわざ凄惨な行為を動画にとってソーシャルメディアで公開していた⁵。それは例えば「クリミア人にバスの窓ガラスの破片を食べさせた」 [松里, 2018: 302] といった行為であり、それらがインターネット上で公開されていた。公開に踏み切った当人たちに罪悪感はなく、「むしろ 良いことをしているつもりだからこそ、凄惨な動画を撮って公開に及んだ」という⁶。

松里は、これらの過激な行動は、それを目にしたドンバス地域の人々に、次なる対象となるのは我が身だという恐怖心を抱かせ、ウクライナからの「離脱」の決意を促したと考える⁷。このことから、ドンバス地域の紛争にマイダン革命が影響を与えたことが分かる。マイダン革命での過激派の行動は、ドンバス地域の紛争と連続したものであると思われるのだ。

3. ドンバス地域について——地域の特色と紛争の展開——

映画の表題にもなっているドンバスとはいったいどのような地域なのか。ドンバス地域のイメージを掴んだうえで、ドンバス地域での紛争を概観することで、第三章で扱う『ドンバス』内で描写される同地域の様子を理解する一助とする。

(1) 炭田で栄えた政治と経済の中心地ドンバス

ドンバスという名称は、「ドネツ炭田」の略称である [藤森, 2018: 57]。ドンバス地域とは、ウクライナとロシアにまたがるドネツ川（ドン川の支流）流域の石炭盆地で、アゾフ海とドン川の間に位置する地域である [Goujon, 2022: 81]。ドンバスという語が示す領域は時代に

よって異なった。ロシア帝国時代にはタヴリア県、エカテリノスラフ県、ハリコフ県、ドン軍管州にまたがっており、ソ連時代には、ウクライナのルハンスク州とドネツク州及びロシアのロストフ州を指していた[藤森, 2018: 57]。ドンバス地方の境界線として知られるのは、ウクライナの行政区ドネツク州とルハンスク州をこの地方とする行政的な境界であるが、2014年以降のこの二州は東西に二分され、西部はウクライナの管理下に属し、東部は同じ名前の分離共和国の管理下に属している。東部には州都のドネツクとルハンスクも含まれている。[Goujon, 2022: 81]

まずは現在のドンバス地域を巡る農業、人口構成比、GDPの側面を概観する。農業では、気候的には北部ステップ地帯に属し、肥沃な黒土が広がっているため小麦、ライ麦栽培に適している土地が広がっている[藤森, 2018: 58]。

ドンバスに定住する人は、ウクライナ人、ロシア人に加え、ギリシャ人、タタール人、アルメニア人、ユダヤ人等、エスニック的に多様である。多様な人が入り混じっている背景には、飢饉や戦争での人手不足を埋めるために、ソ連政府がこれら諸民族を含む人員の補填を行ったことに由来している。[藤森, 2018: 58]

ドンバスの二州であるルハンスク州とドネツク州は、ウクライナ人口の15%、GDPの16%、交易輸出額の35%を稼ぎ出しており[藤森, 2018: 59]、ウクライナ経済に強い影響力を持つ地域である。

藤森は、ドンバス地域を「ウクライナ・エネルギー自給の要塞」だと表現している[藤森, 2018: 59]ように、ドンバス地域の発展には「ドンバス」が意味するドネツ炭田に代表される炭田・石炭産業が欠かせない。以下、ドネツ炭田の開発の歴史を概観しよう。

ドンバスの開発は1721年にロシアの探鉱者カプースチンがドネツ川で石炭を発見したことに遡る。ロシア帝国のバルチック艦隊・黒海艦隊への石炭供給地として開発が始まり、クリミア戦争による中断後、帝国政府による本格的な資源調査が始まり、後の開発の基礎を作った。[藤森, 2018: 57]石炭の開発そのものは、一九世紀の終わりに始まった[Goujon, 2022: 82]。1860年代からは鉄道建設が行われ1886年にはクリヴイリフ〜ドネツク間の鉄道が開通したことにより、鉄鉱と石炭とを結び付けた冶金産業が急速に発達した[藤森, 2018: 57]。鉄道建設の開始以降、外国資本の投入もあり近代化・工業化が進み、ドンバス地域はロシア帝国の中心的な地となった[Goujon, 2022: 82]。ここでの外国資本の投入が炭鉱、コークス工場、冶金工場の大部分を占めるほどであったことから、ドンバスの発展には歴史的に外国資本が欠かせなかったと言えよう。

21世紀においても、ドンバスの二州であるルハンスク州とドネツク州は、ウクライナの鉄鋼業生産量の30%を占め、石炭生産の4分の3を産出し、特に発電用の無煙炭はドンバスのみで産出している。[藤森, 2018: 59]このことから、同地域はウクライナとして独立して以降も鉄鋼、石炭、無煙炭をはじめとする資源を経済の根幹とする地域であることが分かる。

(2) ドンバス地域を巡る紛争の展開

2014年2月末、マイダン革命を受けてキエフで政権が交代したことをきっかけに、ウクライナ東部、とりわけドネツク州とルハンスク州からなるドンバス地域では、反マイダン革命のデモが繰り広げられた。その理由は既述だが、革命派の過激な活動行為を目の当たりにしたドンバス地区の住民が、彼らの次なる対象として自分たちがみなされることに対して抱く恐怖心だとする考えがある⁸。デモに対してウクライナ政権は「反テロリスト作戦」を実施し、デモによって掌握された土地⁹の奪還を試みるもその成果は芳しくなかった。[Goujon, 2022: 98]

2014年4月に、ドネツク州とルハンスク州で、「親ロ派武装勢力」がドネツク人民共和国とルハンスク人民共和国の樹立を一方向的に宣言した。5月11日には、同地で「住民投票」が強行され、両「共和国」は「独立」を宣言したが、ロシアを含む国際社会はこれを承認していない。[合六, 2020: 34]2014年夏には、ウクライナ政府側のウクライナ軍は反テロ作戦を実施し、領土の多くを奪取する。これに対し、ロシアが正規軍を使った露骨な介入を行ったことで、分離主義者の飛び地がより防御しやすい境界線になるまで押し戻した。[塩原, 2022: 81]ウクライナは、ロシアに急激に領土を奪われる状況に対峙して、停戦交渉の席に着くことを決断した[合六, 2020: 34]。

停戦交渉を通じて、2015年2月には、ベラルーシの首都ミンスクにて、ウクライナ、ロシア連邦、ドネツク人民共和国、ルハンスク人民共和国の間で、ドンバス地域での戦闘の停止を同意するミンスク合意が締結され[合六, 2020: 34]、この紛争は終戦した¹⁰。ミンスク合意では「ドンバス和平策として、ウクライナの政治体制の変更、すなわちウクライナ憲法を改正した上で地方分権を行ない、大幅な自治権を与えられた ORDLO (ドネツクおよびルハンスク州特別地区) を含むドンバス全権が回復されることを規定」した[藤森, 2018: 294]。

ミンスク合意の締結以降、ドネツク人民共和国とルハンスク人民共和国がドンバス2州の3分の1にあたる約1万5千km²を実効支配している状況にある。また、二つの人民共和国では、ロシアの影響下でソ連を彷彿とさせる政治・経済・社会体制が作り上げられるようになった。尚、ロシアは二つの人民共和国を国家承認していないものの、ドンバス紛争を「キエフのファシスト・クーデターに対するドンバス人民の自衛行為」と定義し、域内にロシア系住民(ロシア語話者、ロシア民族籍保有者)が多いことに乗じて、ウクライナ政府によるコントロールが困難なロシア・人民共和国間の境界線を通じて援助を行なっている。[藤森, 2018: 293-294]

2022年2月のロシアによるウクライナへの軍事侵攻のきっかけとなったのは、プーチン大統領が「ドネツク人民共和国」および「ルハンスク人民共和国」の両州のロシアへの編入を容認したことに端を発する。ここでロシアへの編入が認められた「ドネツク人民共和国」および「ルハンスク人民共和国」が位置しているのが、ドンバス地域である。即ち、「ドネツク人民共和国」および「ルハンスク人民共和国」の位置を示す表現は、ウクライナのドンバス地方を形成する二州の内、分離共和国の管理下に置かれている地域であると換言出来

る。

本稿の冒頭で引用したように塩原は、「ウクライナ戦争の発端に、ウクライナ東部のドンバス地域で 2014 年以降ずっとつづいている戦闘があることは間違いない」と述べている [塩原, 2022: 81]。「ウクライナ東部で自己宣言によってドネツク人民共和国とルハンスク人民共和国が創設されたことで戦争が勃発した」 [Goujon, 2022: 97]と表現されるドンバス紛争は、塩原の言うようにウクライナ戦争の発端だと認めることが出来よう。

本章では、まずドンバス地域がウクライナ経済の重要拠点であり多様な人々の集まる場所であることを示した。この地にはウクライナの有名産業である小麦生産に適した土壌があり、歴史的に様々な土地にルーツを持つ多様な人が集まって来た経緯がある。さらに、ドンバスという地名の通り、炭田や鉄鋼産業がウクライナ全土の経済に影響を与える基幹産業であり、経済的にもウクライナの中心であると言えることが分かった。

また、ドンバス紛争の経緯を確認すれば、ウクライナからの独立宣言をしたドンバス地域の二つの人民共和国について、ミンスク合意の際には国家承認を行わなかったロシアが 2022 年 2 月 21 日に突然両人民共和国を独立国家として承認し、同時に、国防省に対して両地域での平和維持活動を行うよう指示したことが、同国による軍事侵攻の始まりとして位置付けられる。このことから、ドンバス紛争とウクライナへの軍事侵攻は、直接的な原因関係をもって示せる事象であると言える。

II セルゲイ・ロズニツァ監督について

本章では本稿で扱う映画『ドンバス』の監督であるセルゲイ・ロズニツァについて、その人物像や、映画作品の系統理解などを含めた映画監督としてのキャリアを確認する。

1. ロズニツァのコスモポリタンの性質

ロシアの映画批評家アントン・ドーリン (Антон Владимирович Долин, 1976-) は、自身がホストを務める YouTube 上の対談番組『ラジオ・ドーリン』(『Радио Долин』) でドーリンは、ロズニツァの幼少期について次のように紹介している。

セルゲイ・ロズニツァはウクライナ人を自称していますが、コスモポリタンの映画監督です。ベラルーシの生まれですが、子ども時代と青年期をキエフで過ごし、キエフの大学も出ました。(中略) ロズニツァはモスクワで映画監督になる勉強をし、サンクトペテルブルクにあるドキュメンタリー映画スタジオで働きました。その後は西ヨーロッパに移り、ベルリンで仕事をしていました¹⁾。

(2022 年 3 月 25 日に更新された«Российская Федерация — преемница бесправия»
Интервью Сергея Лозницы 内の当該シーンから筆者が日本語訳を作成)

ロズニツアの来歴の詳細については、ロシアの通信社 РИА НОВОСТИ が 2014 年 9 月に「セルゲイ・ロズニツアの伝記」と題して掲載したロズニツアの略歴¹²に基づいて確認する。その上で、ドーリンに紹介されるようにロズニツアが「コスモポリタンの映画監督」であると窺えるエピソードを一つ記す。

(ロズニツアは) 1964 年 9 月 5 日にベラルーシのバラノヴィッチ市で生まれたウクライナの映画監督である。

1981 年から 1987 年にかけて、キエフ工科大学制御システム学部応用数学科で学び、1987 年に数理工学の学位を取得して卒業した。1987 年から 1991 年までサイバネティクス研究所で研究者として従事した。エキスパートシステム、意思決定システム、および人工知能の問題の開発に携わった。これと並行して、日本語翻訳者としても働く。

1991 年から 1997 年にかけて、全ロシア国立映画研究所 (VGIK) の長編映画監督部門でナナ・ジョルジャーゼのもとで学び、1997 年に優秀生として卒業した。2000 年にはベルリンのニプコウのもとで、2000 年以降はサンクトペテルブルクのドキュメンタリー映画スタジオで監督として働き、2001 年には家族とともにドイツに移住した¹³。

(当該サイトより筆者が日本語訳を作成)

ロズニツアが日本語に堪能であること、また理系出身の映画監督であることは興味深い。ここでは、ドーリンがロズニツアの紹介に使用したロズニツアのコスモポリタンの性質がいかなる側面で表れているかに着目する。ロズニツアのコスモポリタンの性質を表すエピソードを二つ引いて、彼の考え方を紐解いてみよう。

一つ目のエピソードは、ロシア語表記とウクライナ語表記を巡る以下のような事件である。ロシアによるウクライナ侵攻を受けて、日本では、ロシア語での読み方が一般的であったウクライナの地名などをウクライナ語読みする動きが活発化している¹⁴が、ロズニツアに関してもそうした配慮は例外ではなかった。本稿での表記「セルゲイ・ロズニツア」はロシア語の Сергей (名) Лозница (姓) を日本語読みで転写したものである。ロシアによるウクライナ侵攻後に、ロズニツアの映画が日本で新規に公開されることになった際、配給会社はロズニツア自身に日本語の表記方法について、現行のセルゲイ・ロズニツアか或いはウクライナ語読みしたセルヒー・ロズヌィーツアのいずれの表記にすべきかロズニツアに問うたという。そこに対しロズニツアは、「自分の母語はロシア語であり、かつ現在起こっている悲劇は言語に関するものではない」と述べ[有田, 2022: 6]、自身の名称の表記を変更しないこと、また今後もロシア語を使い続けていくことを主張した。

ここにロズニツアのコスモポリタンの性質、即ち、ウクライナ人と自認しながらもロシア語を話している性質が見て取れる。周知のようにウクライナ国民におけるロシア語話者の比率は比較的高かった¹⁵が、開戦以降の状況下においてもロシア語を話したいと考えるウクライナ人はそう多くなく、戦争と言語を徹底して独立させて考えるロズニツアの姿勢は際立っている。

二つ目のエピソードは、2022年2月に行われたロシアによるウクライナへの軍事侵攻の認識を巡る問題である。ロズニツァの認識を理解する手がかりとして、ロシアによるウクライナ侵攻を受けて、ロズニツァが発表した二つの声明を見てみよう。侵攻直後の2022年2月27日の声明¹⁶と、同年3月19日の声明¹⁷である。

2月24日から開始された軍事侵攻を受けて、2月27日にロズニツァは自身のFacebookに自発的に声明を表明した。その全文は以下に示す通りで、ロシアへの批判を明らかにしている。

「ロシアがウクライナに仕掛けた戦争は、自滅的で狂気の沙汰であり、犯罪的なロシア政権の崩壊を必然的にするものでしょう。今、私たちが目撃しているのは、善と悪、真実と嘘の戦いであり、歴史的な出来事なのです。ウクライナは勝利します。」

(ロズニツァの声明¹⁸に基づき筆者が日本語訳を作成)

ロズニツァは、ロシアによるウクライナ侵攻が開始されて間もない時期に、ロシアの侵略行為を「戦争」と表現し、またその戦争がロシア政権の崩壊をもたらすことを述べている。ロズニツァの作品には、前掲のように旧ソ連やロシアを題材にした映画が多くある。ウクライナ領ドネツク州と同領ルハンスク州での様子を描いた『ドンバス』以外にも、例えば、マイダン革命での民衆の様子を描いた『マイダン』、またロシアにとって第二次世界大戦で旧ソビエトがナチス・ドイツに勝利したことを祝う「戦勝記念日」の出来事を描いた『Victory Day』などがある。常日頃ソ連やロシアについて考えているからこそ、先のロシアの侵攻を即座に「戦争」だと述べるのが出来たのではないだろうか。

次に扱う3月19日の声明は、同日にウクライナ映画アカデミーがロズニツァを除名することを決定した文書を発表したことを受けて発表されたものである。この声明では、まず2月の声明には見られなかった国際社会への批判が注目される。もう一つは、映画と戦争の関係性を巡るロズニツァのコスモポリタンの性質を有する解釈である。

前者に関して、ロズニツァは「国際社会は目を覚まし、教訓を学び、ロシアの怪物を倒す時が来た」と述べ、元来のロシア批判に加えて、国際社会に対する警鐘と批判に及ぶ主張をしている。この声明では、「たった今繰り広げられている恐ろしい出来事は、これまでロシアの怪物をなだめながら、ロシアと取引をしてきた偽善的な政策の結果」であるとも述べ、その偽善的な政策については、「欧米の政治家たちは長年にわたり、チェチェン、グルジア、クリミア、ドンバスなどでロシア政権が犯してきた犯罪と向き合わず、プラグマティズム的政治に基づいて妥協してきた」と批判している。ロシアに対する批判に加え欧米諸国への責任を問うようになったことは、2月の声明と比較した際の変化と言える。[有田, 2022: 9]

もう一つの、ロズニツァのコスモポリタンの性質に関しては、以下の点から指摘できる。ロズニツァは、声明文の中で、自身がヨーロッパ国際アカデミー、ウクライナ映画アカデミーから退会したことを明らかにしている¹⁹。前者はロズニツァによる積極的な退会

で、後者は団体からの除名処分である。これに際してロズニツァは、「私はこれまでの人生で、いかなる共同体、グループ、協会、または、「圏」を代表したことはありません」と述べている[有田, 2022: 11]。これは、ロズニツァのコスモポリタンの性質が大いに感じられる発言であろう。この発言に至るまでの背景を追うことを通じて、コスモポリタンの性質を有する彼の複雑な思考回路を紐解いてみたい。

ロズニツァは2月の声明ですでに「戦争」という表現を使用するほど、ロシアによるウクライナ侵攻に対する立場を明確化していた。しかし、ヨーロッパ国際アカデミーが当初発表した声明は、「戦争」という単語が登場しないことはおろか、ロシアを批判することなく中立的でウクライナ人への支援を提供する融和的な立場を示す内容に終始していた²⁰。この認識の違いが原因となり、ロズニツァはヨーロッパ国際アカデミーから退団した。

その一方でロズニツァは、「戦争という悲劇において、人は常識を失わないようにしなければならないと強く信じています。私は、プーチン政権の犯罪を批判し、戦争に反対している私の仲間やロシアの映画製作者たちへの全面ボイコットに反対します」と述べ[有田, 2022: 10]、ロシアの映画製作者への支持を表明した。このようなロシアの映画製作者への支持の表明が、母国ウクライナへの忠誠心の欠如とみなされ、ロズニツァはウクライナ映画アカデミーから除名処分を受けたのである。

以上よりロズニツァは、言語と戦争を切り離して自身が使用する言語を定めていること、映画の制作国や映画製作者の国籍と戦争を切り離して考えていることが分かる。このように、ロズニツァのコスモポリタンの性質が表出されるのは、国や団体の方針や事象の上辺に現れる問題に従うのではなく、対象となる一個人の心情や事象の真底に潜む問題を捉えた自分自身の信条に従って自らの意見形成を行う点においてであると考えられる。

2. 作風とキャリア

配給会社サニーフィルムは、ロズニツァの作風について、彼が制作した映画と彼の歩みに着目して六つに分類している[有田, 2022: 2]。

- [1]1990 — 2000 35mm モノクロ初期短編ドキュメンタリー群
- [2]2000 — 2011 アーカイバル映画で台頭する
- [3]2010 — 2018 カンヌ国際映画祭で成功を収める
- [4]2010 — 2018 拠点をベルリンに移す
- [5]2018 — 2020 新アーカイバル作品群
- [6]セルゲイ・ロズニツァ《群衆》ドキュメンタリー3選

それぞれに対応する制作歴は、以下の表を参照されたい(下表1)。以下の表は、ロズニツァがこれまでに制作した作品を筆者が可能な限り調べ、年代順に示したものである。既に日本で公開されている作品は公開時の邦題を記し、未公開の映画に関しては英語での表題

を記載している。

公開年	表題	映画の種類
1996	Today we will build a house	ドキュメンタリー
1998	Life, autumn	ドキュメンタリー
2000	Half-station	ドキュメンタリー
2001	Settlement	ドキュメンタリー
2002	Portrait	ドキュメンタリー
2003	Landscape	ドキュメンタリー
2004	Factory	ドキュメンタリー
2005	Blockade	ドキュメンタリー
2006	Artel	ドキュメンタリー
2008	Submission	ドキュメンタリー
2008	Northern light	ドキュメンタリー
2010	My Joy	フィクション
2012	Miracle of St. Anthony	ドキュメンタリー
2012	Letter	ドキュメンタリー
2012	In the Fog	フィクション
2014	Maidan	ドキュメンタリー
2014	Old Jewish cemetery	ドキュメンタリー
2015	The Event	ドキュメンタリー
2016	アウステルリッツ	ドキュメンタリー
2017	A Gentle Creature	フィクション
2018	Victory Day	ドキュメンタリー
2018	ドンバス	フィクション
2018	肅清裁判	ドキュメンタリー
2019	国葬	ドキュメンタリー
2020	Night at the Opera	ドキュメンタリー
2021	Babi Yar.Context	ドキュメンタリー
2021	Mr.Landsbergis	ドキュメンタリー

(表1：セルゲイ・ロズニツァの作歴)

この表より、ロズニツァがこれまでに制作した作品は、24作のドキュメンタリーと4作の長編フィクション映画であることが分かる。つまり本稿で扱う『ドンバス』はフィクション映画であることから、彼の作品においては珍しい作品形態であることが判明する。

また、配給会社サニーフィルムのパンフレットは、ロズニツァの作品を三分類してい

る。すなわち「ロズニツアの映画には分かりやすく三つのスタイルがある。一つは自らが撮影するオブザベーション映画。二つ目は過去のアーカイブ映像を再編するアーカイヴァル映画。そして、三つ目に長編劇映画」に分かれるという[有田, 2022: 2]。前述の表においてフィクション映画と示されている『ドンバス』は、こちらの三分類に従うと長編劇映画である。

パンフレットは、ロズニツアが映画の題材として多く扱うテーマについて、「ロズニツアは自らのバックグラウンドであるソビエトや過去と現在の戦争をテーマに映画制作をしてきた」と付け加えている[有田, 2022: 2]。以上より、本稿で扱う『ドンバス』は、ロズニツアの映画作品の中では珍しいフィクション映画の形態をとるが、上述した「ソビエトや過去と現在の戦争」をテーマに掲げる作品である点において、映画のテーマとしては奇異ではなく、彼の一連の作品に通ずるものであると言える。

次にロシアの通信社 РИА НОВОСТИ による既出の記事²¹を用いて、ロズニツアの映画監督としてのキャリアを示す。

セルゲイ・ロズニツアは、1996年にドキュメンタリー映画の制作を開始した。

『Portrait』(2002)、『Blockade』(2005)、『Artel』(2006)などの作品例がある。最新のドキュメンタリー映画作品は、アンソロジー映画の中編小説『Bridges of Sarajevo』(2014)と『マイダン』(2014)が挙げられる。ロズニツアの作品は、ロシア国内の Nika 賞と Lavr 賞のほか、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭、ライプツィヒ国際映画祭、オーバーハウゼン国際映画祭、パリ国際映画祭、マドリッド国際映画祭、トロント国際映画祭、エルサレム国際映画祭、サンクトペテルブルク国際映画祭からの賞を含む、さまざまな国際映画祭から賞を受賞している。2010年5月、カンヌの国際映画祭にて、セルゲイ・ロズニツアの『My Joy』が初演を迎える。同作品は、ロシアで開催された Kinotavr 祭で最優秀監督賞と映画批評家および映画批評家連盟賞を受賞し、エレバン国際映画祭で「シルバーアプリコット」賞やアナパ国際映画祭では最優秀脚本賞である「キノショック」賞などを受賞。2012年には、2作目の長編映画『In the Fog』を公開した。同作はヴァシル・ビカウによる同名の物語を映画化したものである。監督は、映画『My Joy』よりも早く、物語の映画化に取り組んだ。これは彼にとって初の長編劇作品となった。『In the Fog』は、カンヌ映画祭の FIPRESCI 賞、タルコフスキー映画祭「Mirror」の最優秀賞、優秀演技賞、コットブス国際映画祭のエキュメニカル審査員賞を受賞した。

(当該サイトより筆者が日本語訳を作成)

ここでは、ロズニツアが映画監督として頭角を現したとされる起点を確認したい。ロズニツアは1996年から映画監督としてのキャリアを歩み始めており、2010年の『My Joy』はカンヌ国際映画祭で初上映を迎えている。2010年は、配給会社サニーフィルムから出版されたパンフレットにおいても起点とされる時期である[有田, 2022: 29]。ここから、ロズニツアが映画監督として頭角を現した時期を2010年と仮定すると、本稿で取り上げる

『ドンバス』は、その8年後の作品となる。詳しくは第三章にて後述するが、『ドンバス』は様々な受賞歴を持つ作品であることから、2010年以降のロズニツァの映画監督としての成長は目覚ましいものであったと想像できる。

III 『ドンバス』の立場

本章では『ドンバス』について、第一に作品内容、第二に受賞歴や映画批評の観点から概観する。またドンバス紛争について扱った『ドンバス』以外の他の映画の概略を示し、ドンバス紛争を扱う映画の中でロズニツァの『ドンバス』がどのような立場にある作品であるのかを示す。

1. 作品内容

オランダにある配給会社 Atoms&Void から 2018 年に公開された『ドンバス』(原題: ДОНБАСС [DONBASS]) は、121 分からなるカラーフィクション映画である²²。ロズニツァは、脚本監督・撮影監督として同作品に参加している²³。ロズニツァの公式サイトを参照すると、『ドンバス』の内容は次のように説明されている²⁴。

ウクライナ東部の地域であるドンバスでは、分離主義者のギャングによる大規模な殺人や強盗と並び、ハイブリッド戦争を含む武力紛争が発生します。ドンバスでは、戦争は平和と呼ばれ、プロパガンダは真実として語られ、憎しみは愛であると宣言されています。ドンバスの旅は、グロテスクとドラマが生と死のように絡み合った一連の好奇心旺盛な冒険として展開されます。これは、1つの地域、1つの国、または1つの政治体制の物語ではありません。それは、ポスト真実と偽のアイデンティティで失われた世界についての物語です。それは私たち一人一人についての物語です。

(ロズニツァの公式サイトより筆者が日本語訳を作成)

同作を日本で配給したサニーフィルムは同作を、「クライシスアクターと呼ばれる俳優たちを起用して作るフェイクニュースから始まり、支援物資を横領する医師と怪しげな仕掛人、湿気の充満した地下シェルターでフェイクニュースを見る人々、新政府への協力という口実で民間人から資産を巻き上げる警察組織、そして国境での砲撃の応酬……。無法地帯“ノヴォロシア”の日常を描く13のエピソードは、ロシアとウクライナの戦争をすでに予見していた。ここでは一体何が起きているのだ」と説明する²⁵。両者の説明の仕方に違いが認められる点については、第四章にて詳しく記述を行う。

次に映画で描かれる事柄について、配給会社であるサニーフィルムのパンフレットや池田嘉郎による説明を参照すると、『ドンバス』は以下に引用する13のエピソードから構成されていることが分かる[有田, 2022: 15-24, 33]。以下、これら13のエピソードを辿りながら映画のあらすじを説明する。

映画の冒頭は、①「フェイクニュースの撮影現場」を取り巻くシーンが写される。化粧室のあるコンテナでは、十名ほどの男女がメイクなどの準備をしている。若い女がやってきて男女に指示を出すと、彼らは外に向かう。そのうちの一人は、「今しがた鳴り響いた爆発音を聞いて外に出ると人が死んでいた」とテレビクルーに虚偽の証言をする。

次いで、②「襲撃を受けるウクライナ市議会と議員」が描かれる。市議会に乱入してきた記者を名乗る女は政府系の新聞に虚偽の記事を掲載され被った名誉棄損の反撃をするために、市長の頭に汚物をかける。市長の妻はその攻撃を目にして女と激論を交わし対抗しているが、その様子は周りの市議会議員らによって動画撮影されている。

③「東部占領地域にある産院での抗議運動」の様子が描かれる。本来病院に配給される予定の食糧や医薬品が未配給だと抗議する看護師をなだめにきた男は、「病院長とその愛人が品々を横領」していると糾弾する。しかし、糾弾した男と病院長は組んでおり、男の力を借りて配給の仕事を他人に押し付けることに成功した病院長は、男に報酬を差し出す。

④「二台の車が検問所を通過する」シーン。一台は先ほどの男と病院長が乗る車で、東部占領地域からウクライナに向かい、もう一台は東部占領地区の住民が乗るバスで、ウクライナから自宅のある東部占領地域に向かう。前者は事無くして検問を通過しウクライナに入るが、後者は分離派兵士からウクライナ軍との関係を取り調べられ携帯を没収される。

⑤「東部占領地域を外国人ジャーナリストが取材する」様子が描かれる。取材にあたって彼らも検問所で検査を受けた際、分離派の兵士にパスポートを取り上げられたりウクライナ軍の民間人への行為を報じるよう脅されたりする。また、ファシストだと罵られる。前線にいる兵士は写真撮影には応じたが、出身地や自らの部隊の上司については口を閉ざす。

⑥先のドイツ人ジャーナリストによる「地下シェルターの取材」が描かれる。ジャーナリストのカメラは、案内人帯同のもと地下シェルターで暮す人々を捉える。地下シェルターで避難生活を送る年老いた母の連れ出しを試みた娘の説得は失敗に終わる。地下シェルターでは、冒頭のシーンで制作されたニュースを眺め、地下に避難する人々は不安を募らせる。

⑦「地域政府首長と宗教団体の面会」のシーンに替わる。先ほど母を説得に来た娘は、新政府首長の秘書だったようだ。彼女らを訪ねた宗教団体はノヴォロシヤ政府の誕生式典の開催を希望するが、首長はそれに関心を示さず提案を一蹴する。しかし宗教団体が開催の見返りにベンツを3台献上すると提示すると、首長は「一台で良い」と開催を暗に容認する。

⑧首長が窓の外に目をやると、「規律違反を行った分離派兵士に対する懲罰」が行われ用としている現場が映し出される。任務中に民間人の携帯を奪うという規律違反が認められた民兵は、人間回廊を歩くよう命じられ、棒を持った兵士に叩かれながら隊列を往復する。

⑨シーンは切り替わり「占領地区警察による盗難車の接収」が描かれる。盗難車の持ち主として警察署を訪れた男は部屋に通され、車を地域警察に委託する旨に賛同する署名の記入を指示された。男は略奪行為だと反論するが、警察に娘の誘拐をネタに脅され罰金の支払いを命じられた。観念した男が案内された別室では、男と同様の状況の人が何人もいた。

⑩次いで、「ウクライナ兵捕虜への見せしめ行為」の様子が描かれる。警察本部の人間と

共に市街地に来たウクライナ兵捕虜は、「討伐隊 志願兵」と書かれた張り紙を張られ電信柱に括りつけられる。そこに居合わせた不良青年らが捕虜兵に暴力行為を行い始めると、周囲の人も集まって捕虜兵への暴力行為に加担し集団リンチを行うのである。

⑪ウクライナ捕虜兵に暴行を加えた不良青年らも参列者として映し出される「ノヴォロシヤの結婚登録所」での一幕が描かれる。式を経て、男女はノヴォロシヤの婚姻・家族法に則った夫婦だと認められる。ノヴォロシヤの国歌が大音量で流れる中、式の終了に伴って兵士は戦地に戻るため会場を後にすることを新郎に伝える。

⑫「ウクライナ軍と占領地域の軍との間で激化する戦闘」のシーンが描かれる。結婚式を後にした兵士が乗り込む戦車が砲撃を行った対象は、ウクライナへの検問所に並ぶ民間人を乗せたバスだった。ウクライナ軍は夜間移動する彼らに報復を行った。

⑬映画は冒頭と同様に「フェイクニュースの撮影現場」の様子を映し出す。冒頭で虚偽の証言をした女は前回の報酬が未払いであるといら立ちながらも、メイクをして準備を整える。しかし彼女が虚偽の証言を行うことはない。なぜなら人数を確認しに来た指示役の若い女に帯同した複数の男らが、準備に勤しむ俳優を全員殺してしまうからである。こうして、俳優たちがフェイクニュースの材料として消費されるところでエンドロールが流れ始める。

2. 受賞歴と映画批評

ロズニツァの公式サイトに基づいて『ドンバス』の受賞歴を確認してみると、次に列挙されるように多数の受賞歴があることが分かる²⁶。

2018年 カンヌ映画祭 ある視点 オープニング作品賞最優秀監督賞

2018年 レイキャビク映画祭映画祭 クリエイティブエクセレンス賞

2018年 カイロ国際映画祭 最優秀監督賞 「銀のピラミッド」

2018年 モスクワの現代美術のガレージ美術館 特別上映

(ロズニツァの公式サイトより筆者が日本語訳を作成)

その他にも、ミュンヘン映画祭やトロント国際映画祭、プサン国際映画祭などを含めた二八の映画祭で『ドンバス』は上映された。『ドンバス』がカンヌ映画祭で上映されたことに対して、ロズニツァは「この映画を、最も要求の厳しい、経験豊富で敏感な観客、つまりカンヌ映画祭の審査員と観客と共有できることを嬉しく思います。政治家の注意をこの問題に向けさせることは、私にとって非常に重要です。私が知る限り、『ドンバス』は私たちの時代の主な問題です。それは地域、国、または政治システムに関するものではなく、全体としての人類と文明に関するものであり、今日の私たち一人一人に関するものだ」と述べた²⁷。

次いで、『ドンバス』に寄せられた映画批評に着目する。上述した映画祭での受賞理由には、映画が評価された根拠が含まれると思われるが、残念ながら該当する批評を発見出来兼ねた。そのため、レイキャビク映画祭映画祭の開催に合わせて、シカゴ映画批評家協会に所

属するフェイガーホルムが寄稿した記事における批評を取り上げる。フェイガーホルムの寄稿文において『ドンバス』の作品内容を、「完全に没入できる中心的な主人公がいないことで、この映画は、地元の民族主義者がロシアの支援を受けたドネツク人民共和国と衝突するにつれて、ウクライナ東部でエスカレートする狂気に関する不条理な寓話である以上に、灼熱のドラマとして機能」していると評した²⁸。同氏は『ドンバス』の撮影ディレクターを務めたオレグ・ムツを現存する撮影ディレクターの中で最も優秀であるとみなし、「彼の構図のセンスは非の打ちどころがなく、(中略) 群衆の中で主人公の顔をつかむことで緊張を高めたり、心に訴えかけたり」する効果があると述べた²⁹。

また、「ドンバス：リアルすぎるウクライナの風刺」と題されたBBCの特集記事で、『ドンバス』は次のように批評された。「ロシアによるウクライナへの侵攻が始まった直後に、ロズニツァのフィクション映画『ドンバス』ほど巧妙な証拠はありません。本作品は、2014年以来ロシアの分離主義者によって支配されているウクライナ東部の一部での生活の鮮やかな万華鏡です。そして『ドンバス』は今までの作品以上にタイムリーです。映画は十分に公平な風刺として宣伝されていますが、実際には不思議の国のアリスの不条理を織り交えたドキュメンタリーのようになっています。『ドンバス』は、戦争の貴重な背景を提供するだけでなく、私たちがニュースで見ているものと芸術がいかに親密で目を見張るような対象物になり得るかを明らかにします」と記述される³⁰。

『ドンバス』に関する評価は、中心的な主人公がいないことで鑑賞者の没入を促すような内容が展開する作品である点やそれを可能にしたオレグ・ムツの存在などの内容面に及ぶものから、現在のウクライナ侵攻と合わせて戦争の背景を提示する作品である風刺としての側面にまで及んでいることが分かる。

3. ドンバスを扱う他作品

ドンバス紛争を扱った映画作品は、もちろんロズニツァの『ドンバス』に限定されず、他の監督による作品も存在する。そのため本節ではドンバス紛争を扱った他の映画作品について概観する。尚、ドンバス紛争を扱った映画を調べるにあたっては、TheMovieDateBaseを参照した。

先述のTheMovieDateBase内で、ドンバス紛争に関係する映画はロズニツァの『ドンバス』の他に十の該当作品があった。以下ではTheMovieDateBaseでの記述に基づいて、該当作品について、公開年、表題、監督、映画の種類、制作国の順番に列挙する(表3)。尚、日本で上映された映画や公開された映画は、その表題を併せて示す。

公開年	表題	監督	種類	制作国
2014	Stronger than Arms	ユリア・ホンタルク	ドキュメンタリー	ウクライナ
2016	ドンバス 2016	アンヌ=ロール・ボネル	ドキュメンタリー	フランス
2017	Kiborgy (ソルジャーズ ヒーロー・ネバー・ダイ)	アフテム・セイタブラエフ	アクション、冒険	ウクライナ
2019	Beshoot (ウクライナ・クライシス)	イヴァン・チムチェンコ	ドキュメンタリー	ウクライナ
2020	Lethal Kittens	ヴォロディミル・ティヒイ	コメディ	ウクライナ
2020	Demon	イエゴール・トロヤノフスキー	ドキュメンタリー	ウクライナ
2021	Bad Roads	ナタリア・ポロズビト	戦争ドラマ	ウクライナ
2022	Klondike	マリナ・エル・ゴルバチ	戦争ドラマ	ウクライナ、トルコ ³¹
2022	Freedom on Fire: Ukraine's Fight For Freedom	エフゲニー・アフィネフスキー	ドキュメンタリー	イギリス、ウクライナ、アメリカ
2022	Obmin	ウラジーミル・ハルチェンコ・クリコフスキー	戦争ドラマ	ウクライナ

(表3：ドンバスを扱った映画)

同サイトでは、ロズニツァの『ドンバス』は「戦争ドラマ」というジャンルに区分されている³²。そのため、例えば2021年に公開された『Bad Roads』などとロズニツァの『ドンバス』は同ジャンルの映画作品だと分かる。

ここでは、日本からも鑑賞のアクセスが可能な『ドンバス 2016』(2016)と、日本でも放送されたことがありロズニツァも鑑賞したことがあるという映画『Kiborgy』(2017)について概略を示す。

『ドンバス 2016』は、フランス人映画監督のアンヌ=ロール・ボネルによる作品である。「いかなる権威にも屈することのない人民の言論機関」であることを謳う長周新聞では同作品を、「2015年、ウクライナ東部ドンバス地方を訪れた撮影チーム」によって撮影された

ドキュメンタリー映画であり、「当時からドンバス各地の都市がウクライナ政府によるミサイル攻撃で廃墟と化し、住民が地下室に閉じこもる生活を強いられていたことを、名も無い老若男女の証言を交えて映し出している」と説明する³³。日本で公式には公開されていない作品であるが、一般ユーザーが日本語字幕を付けた動画がある。2023年1月30日現在、YouTubeにて閲覧することが出来る³⁴。

『Kiborgy』(2017)は、日本ではWOWOWにて初公開となる放送がなされて以降、実際に視聴することは不可能な状況が続いている。同作品を放映したWOWOWでは同作品を、「まだ遠い過去ではない2014年、ドネツク国際空港を舞台にウクライナ軍と義勇軍が親ロシア組織を相手に繰り広げた死闘を再現」した作品で「ウクライナの社会派ハード戦争アクション」と紹介している³⁵。『Kiborgy』を鑑賞したロズニツァは「人々にとっての故郷や戦争に対する考え方も様々」であることを認識させる作品だとの理解を示した³⁶。そして、同作の監督であるアフテム・セイタブラエフについては、「彼は素晴らしい人物であるが、私が避けようとする宣言性を含む映画を制作している」と評した³⁷。ロズニツァの考えと近い映画監督として、アメリカの映画監督兼脚本家であるテレンス・マリック(Terrence Malick, 1946-)を挙げた³⁸。

ドンバス紛争を扱った作品を概観したところ、この主題は、戦争ドラマなどのフィクション映画に限らずドキュメンタリー映画としても扱われていることが判明した。すると、ドンバス紛争を主題に扱うロズニツァの『ドンバス』が、彼の得意とするドキュメンタリー映画として撮影されていないことは不思議なことであると考えられる。ロズニツァがこれまでに制作した映画のほとんどがドキュメンタリー映画であることを鑑みると、ドキュメンタリー映画としても扱うことが可能であった『ドンバス』をフィクションドラマに分類される戦争ドラマとして描いていることは一見の注目に値する。

IV 『ドンバス』の分析

以下では、ロズニツァの『ドンバス』が、彼の映画制作において珍しい手法であるフィクション映画として制作された理由について、第一に作品を構成するエピソード、第二に表題、第三に出演者の演技の観点から分析する。分析に先立って、ロズニツァの発言を参照し、ロズニツァが『ドンバス』をドキュメンタリー映画ではなく、フィクション映画として描いた理由を明らかにする。

1. ドキュメンタリーとフィクションの境界を巡る挑戦

ロズニツァは、「ドキュメンタリー映画監督として名を馳せたあなたにとってフィクション映画を作ることの意味は何か」と問われた質問に対して、「ドキュメンタリーとフィクションの境界線に興味があります。ドキュメンタリーを作るときは、長編映画と同じように、構成し、構築して制作します。(ドキュメンタリーを作る時に)周りで何が起きているのかにはあまり興味がなく、自分が従うアイデアに興味があります。この真正性を失う境界と

真正性を獲得する境界は非常に興味深いものです。なぜなら、それは私たちの世界の認識に関係しているからです。私たちが何を記録物として認識しているのか、何を映画の真正性として認識しているのかということ」だと回答している³⁹。ここから、既にドキュメンタリー映画監督として評価を得たロズニツァだからこそ、ドキュメンタリー映画ではないフィクション映画の制作を新たに試みているという背景を確認することが出来る。

映画評論家として著名な町山智浩は、「これが劇映画なのか？ドキュメンタリーなのか？酷な悲劇なのか？コメディなのか？（中略）セルゲイ・ロズニツァ監督の『ドンバス』（2018年）を観ると当惑するに違いない」と述べている[有田, 2022: 43]。この発言からも、『ドンバス』が鑑賞者に対して、ドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を問う作品として機能している側面が認められる。

前述のように、ロズニツァ監督は「ドキュメンタリーとフィクションの境界に興味がある」と述べている。それでは彼の挑戦は『ドンバス』で完結したのかと問われたら、否であろう。ドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界に肉薄する映画制作のために、ロズニツァは「次の試みは、年代記を含めながら映画を作ることです。視聴者が、私が何を撮影したのか理解できず、年代記がどこにあるのかを理解できない作品を制作することは、私にとって最も高揚します。私はこれを扱った作品を作ることに関心があり、新しい形、私の考えを表現する機会を探すことに興味がある」と今後の映画制作における理想を語っている⁴⁰。

以上から、『ドンバス』は、ロズニツァが今後取り組みたいと意欲を見せる「年代記を含めた」映画でないものの、鑑賞者にドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を問う作品となっていることが窺えよう。

2. 『ドンバス』におけるロズニツァの挑戦

(1) 作品内容

前節では 13 のエピソードにおいて具体的に描かれている内容に言及したが、本節では『ドンバス』のこうしたエピソード構成の狙いについて検討しよう。

『ドンバス』を構成する 13 のエピソードの選出について、ロズニツァは次のように述べている。「この映画には 13 のエピソードがあります。そのうちの 7 つは YouTube の資料に基づいており、残りはケースメート、刑務所、地下室でどのように過ごしたかについての人々の物語です。車やその他の財産がどのように搾り取られたかを扱っています。彼らのほとんどは中産階級のビジネスマンで、何が起きているのかすぐにはわかりませんでした。彼らはこのスケートリンクの上に落ち⁴¹、それはまさしく戦争の始まりでした」⁴²。

つまり『ドンバス』においては、実際に発生した出来事に依拠する形で作品の内容を構成しているところにドキュメンタリー映画としての側面が確認出来る一方で、資料を活用しながら再現するわけではなく資料に依拠しながら映画を制作しているところにフィクション映画の側面が認められると言える。

ロズニツァが同作品において、ドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を問う

挑戦を行っていることは、この映画をめぐる監督の公式サイトと日本の配給会社による作品介绍の相違からも推測できる。日本の配給会社の紹介は、この作品の具体的な構成要素からドンバスを紐解くことを目標に据えているようだ。しかし監督の公式サイトにおいては、ドンバスで発生している出来事は抽象的に表現される。つまりここでは、ドンバスで発生している状況が他の地域でも発生しうるという可能性を示しているのである。ここに双方の異なる点がある。

ロズニツァ監督は、作品を構成するエピソードを YouTube 等から選びだすことで事実を描くという側面を強めつつも、同作品の説明においては、その内容をドンバスの実情としては強調しない。つまりこの作品においてロズニツァは、ドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を問う挑戦を行っていると考えられるのである。

(2)表題が表す具体性と抽象性

『ドンバス』がドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を問う作品であるとみなせる作品内容以外の理由には、映画に名付けられた表題もあると考える。ロズニツァは、「一般的に、自分の映画に簡単な表題をつけようとする」と述べている⁴³が、フィクション映画である『ドンバス』にも他のドキュメンタリー作品と同様に非常に明瞭で簡潔な表題が付けられている。『ドンバス』に限定すれば、同作品の表題は、「そこで起こっている出来事を特徴づける非常に痛烈な言葉」であることと「場所ではなくそこで発生した現象」について示した表題であるという⁴⁴。

しかしその一方でロズニツァは、ドンバスで発生した現象について、「ソ連崩壊後のあらゆる場所で発生する可能性のある現象」であるとも述べている⁴⁵。『ドンバス』という表題には、ドンバス地域で起こっている出来事を扱うという点でドキュメンタリーとしての意味がありつつも、ドンバス地域に限定されず他の地域でも今後発生しうる可能性がある現象——現時点においては発生していないフィクションの現象——を描いているという点で、フィクションとしての意味も有るといえることが分かる。『ドンバス』という表題もまた、同作品をドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を問う作品として成立させる要因だとみなせるのではないか。

(3)演技が示す境界

村井源と川島隆徳は、一般的な映画批評に含まれる因子を、「俳優一般」・「演技」・「画面」・「物語」・「場面」・「主題」であると定義した[村井・川島, 2012: 212]。以下では、ロズニツァの『ドンバス』に存在する多様なバックグラウンドを持つ出演者とその演技に注目して、作品内容や表題に加え出演者の存在が、『ドンバス』のドキュメンタリー映画の側面とフィクション映画の側面の境界線を鑑賞者に問うていることを明らかにしたい。

i. 『ドンバス』における出演者の存在

『ドンバス』に登場する出演者は、俳優、事情をよく知る人（詳しくは後述）、エキストラからの三種類の立場の人から構成される。俳優に分類される人は、言わずもがな映画のパフレットにその名前が登場するような、演技を専門としている職業人である。『ドンバス』を彩る代表的な俳優として挙げられるタマラ・ヤツェンコ（Тамара Александровна Яценко、1955-）、ボリス・カモルジン（Борис Борисович Каморзин、1966-）、トルステン・メルテン（Thorsten Merten、1966-）は、それぞれ色々な作品に出演している。『ドンバス』内では、フェイクニュースづくりに参加しているタマラ・ヤツェンコは、ロシア演劇芸術アカデミーの卒業生で1993年には、演劇、音楽、映画の発展において傑出したウクライナの芸術家に与えられる名誉称号である「ウクライナ人民賞」を受賞している⁴⁶。仕掛け人役を演じたボリス・カモルジンもまた演劇学校出身者であり、2016年には『僧侶と悪魔』での演技が、ロシア映画芸術アカデミーによって授与される最優秀助演男優賞ニカ賞に選出されている⁴⁷。ロズニツァに「ドイツで有名な俳優」と評された⁴⁸トルステン・メルテンは、ドイツにルーツを持つ俳優で、『ドンバス』ではドイツ人ジャーナリストを演じた。

次に「事情をよく知る人」という出演者がいる。『ドンバス』では、トルステン・メルテン演じるドイツ人ジャーナリストの通訳兼カメラマン役を演じたアレクサンドル・チェシンスキー（Александр Течинский、1979）のことを指す。ロズニツァは、彼を「ドキュメンタリー映画製作者、ジャーナリスト、写真家」と説明し、「外国人ジャーナリストのグループを戦争地帯に護衛」する形で当初から現場にいた彼に信頼を置いている⁴⁹。ロズニツァが書いた台本に彼が修正を加えることを許可され認められていることから、ロズニツァが彼を信頼していることが見て取れる⁵⁰。本来、俳優業を生業としていないチェシンスキーが『ドンバス』に出演するきっかけを作ったのもロズニツァであった。ロズニツァが彼に出演を依頼し、彼が快諾したことで『ドンバス』への出演が決定したという⁵¹。

最後にエキストラの存在である。『ドンバス』には2000名以上の出演者がいる⁵²というが、その多くを占めるのがエキストラである。ロズニツァが最も撮影が困難であったとみなす「殴るシーン」では、「行動全体の中に発展があるのと同時にランダム感を与える必要があり、そのためには全員が同時に行動する必要」があったために、200人のエキストラと、20人から30人の俳優が群衆の中にあるシーンが撮影されたという⁵³。

ii. それぞれが行う演技

浅沼が言うように「現実的世界内存在としての俳優が「映画のための世界」内存在に転換するためには、演技は必要不可欠なもの」であることを理由に、「[素人俳優]の場合にも演技が要請されることは言うまでもない」[浅沼、1990: 161]との立場に立てば、『ドンバス』に限らず、映画に出演する人は皆、演技をしていることになる。また同様に「俳優は映像テキストの形成者ではなく、「映画（映像）のための」テキストを構成する要素——いわば素材的要素——であり、その点では、装置や小道具と同じ範疇に属している」という立場に立てば、俳優という存在は映画にとってドキュメンタリーの側面ではなく、フィクションの側

面を際立たせる存在として機能していることが分かる[浅沼, 1990: 160]。以下では、素人であっても出演すれば演技をすることに伴って作品にフィクション性を与えているという立場を踏襲して、『ドンパス』を構成する3種の人々が行っている演技やその演技が与えるフィクション性について検討する。

まず、俳優の演技についてである。浅沼は演劇における演技と映画における演技を二分しているが、それぞれが「言語テキスト——戯曲ないしシナリオ——によって規定された創造的出来事を具体化するという点では、二者の間に根本的な差異はないと言えるだろう」[浅沼, 1990: 158]と述べている。

浅沼は俳優の演技を、「戯曲の定義する「劇的世界」内の行為を、言語的テキストの解釈的解読と現実世界からの引用によって、自己の身体的動作として具体化して行く」ことであるとし、「俳優は舞台上で他者を対象にした行為（動作）をしているのではなく、そのような行為を、自己の身体的動作による現実的世界からの身体記号の引用によって、織りなして（texere）いる——テキスト（textus）化している」存在だとみなしている[浅沼, 1990: 157]。

ただし、その上で映画における俳優が具体化した出来事は、「観客にではなく、カメラに対して呈示」されることが、演劇と映画における演技の違いであると主張する[浅沼, 1990: 158]。また映画における俳優の演技は、観客でなくカメラに対して呈示されていることによって、映画監督は自身の理想とする作品に近づけられることも示唆している。それは、「俳優は観客の目を直接意識することではなく、その動作が観客の意識に対してあるテキストを織りなすこともない」ということに加え、「俳優の動作を見ているのは監督（映像テキストの形成主体）やカメラマンなどであるが、彼らは俳優の行為（動作）が——あるいはそれが織りなすテキストが——それからの引用によって自分自身のテキスト（映像のテキスト）を織りなすのに相応しいか否かを——引用対象（本文）として適当であるか否かを——判断しようとしている」からである[浅沼, 1990: 158]。ベラは「どんなに熟練した俳優に対しても、監督はクローズ・アップの撮影の前に次のような注意を与える」という。その注意とは、「演技をしてはならない！全然、何もするな！ただ自分の状態を感じろ！《おのずから》君の顔にあらわれてくるものだけで結構なんだ！」というものだ。[ベラ, 1992: 103]一見すると、これは監督が俳優に対して、俳優のありのままを要求しているともみなせる。しかし、このように俳優に対してありのままの状態を求めることもまた、監督が自分自身のテキストを織りなすために必要な要素でしかないのである。映画における俳優の演技は、「映画のための世界」——引用対象としてのテキスト——の形成者ではありえても、映像のテキストの直接的かつ最終的な形成者ではありえない」とみなしている[浅沼, 1990: 158-159]。

事情をよく知る人とエキストラは、求められる演技をすることが見込まれて出演が決定していると考えられる。彼らは浅沼がいうところの「素人俳優」だとみなせるが、その素人俳優は、「演技力によってではなく、シナリオによって概略規定された想像上の人物との類似性を基準として、現実的世界から選びとられる」のだとされる。そして、シナリオ内で規定された人物と類似性を持った素人俳優は、「顕示」として類似性を持つシナリオ内の想

像された人物を代表する一種の典型としての意味をもっているのだという。事情をよく知る人としてキャストされたアレクサンドル・チェシンスキーは、ロズニツァが扱った題材への造詣が深いだけでなく、ロズニツァが書いた台本への加筆修正を行っていた点からも、「シナリオによって概略規定された想像上の人物との類似性」が極めて高い人物であると言えよう。[浅沼, 1990: 160]

ここで、俳優やエキストラに対してロズニツァがどのような演技を求めているのかが明らかになれば、出演者という要素が、ドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界線を問う映画としての『ドンバス』に影響を与えているか否かを示すことができるだろう。

iii. ロズニツァが求めた演技

ロズニツァが求めた演技に関しては、彼自身のインタビューでの発言に依拠しながら論を展開することが可能である。一方で彼が出演者に対して具体的にどのような演技指導を行ったかについては、該当するものを発見することが出来兼ねた。そのため、一部の俳優が、『ドンバス』の出演者として選出された理由を述べたい。

ロズニツァは、占領区の地域警察を演じたゲオルギー・ジェリエフと占領区の結婚踏力所の司会役を演じたナタリヤ・ブジコをキャストした理由を、「素晴らしい俳優だから」としつつも、そのきっかけについては、「(ロズニツァの) 代理アシスタントが二人と同じ飛行機に搭乗していたから」であるとした⁵⁴。そして、飛行機に搭乗した「代理アシスタントが二人に会ったことを教えてくれたので、二人に会う機会をセッティングするように依頼した」のだという⁵⁵。『ドンバス』のキャストに偶発性が認められるのは、ロズニツァは、「私は運命が私に言うことをよく聞く」と発言していることとも関連しているだろう⁵⁶。

ロズニツァは、自分の映画に出演していない人々の意見を聞くことを大切にしていた。その理由について、「大衆の話を聞いて、彼らの生き方を理解することは私にとって重要」であり「大衆の生き方を映画に反映させたかった」としている⁵⁷。

従って、ロズニツァが俳優やエキストラに対して求めた演技は、その土地を生きる人々の生き方が反映されている演技であると考えられる。そのように考えた際、『ドンバス』において事情をよく知る人としてキャストされたアレクサンドル・チェシンスキーや撮影場所でキャストされたエキストラなどは、ロズニツァから彼ら自身の生き方を再現することが求められていたのだと推測できる。一方で、俳優に対しては、ロズニツァはト書きを活用するなどの手法を通じて、「その土地を生きる人々の生き方」を伝えたのだと考えられる。すると、俳優に対してはロズニツァが行った「その土地を生きる人々の生き方」の解釈が伝授される一方で、事情をよく知る人やエキストラはその土地を生きる人々の生き方を理解する当事者として彼ら自身の解釈に基づいた「彼ら自身の生き方を再現する」ことが求められていたのだと推測できる。

おわりに

本稿では、ロズニツアの『ドンバス』をフィクション映画として撮影した理由が、ドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を問うことに関心があるからであることを示した。そしてその境界を問う具体的な要素として、作品内容と表題、出演者の観点を示した。

作品内容や表題は、映画で描かれている出来事が「ドンバス」だけで発生しているわけではなく他の地域でも発生する可能性を示唆している。これによって『ドンバス』にはドキュメンタリー映画としての側面とフィクション映画としての側面の双方が備えられていることが分かった。

演技に関しては、ロズニツアが『ドンバス』を彩る多様なバックグラウンドを持つ出演者に求めた表現に着目した。その土地を生きる人々の生き方が反映されている演技を求めるロズニツアは、俳優に対しては彼自身の解釈に基づく演技を求める一方で、事情をよく知る人や撮影現場でキャストイングしたエキストラに対しては、彼ら自身の解釈に基づく演技を求めているということが明らかになった。無論、「ありのまま」であることを監督が出演者に要求する際にもまた、出演者の表現は監督が表現したい映像テキストの再現を前提とした行為の範疇に収まっていることには注意しなければならない。しかし、「事情をよく知る人」と「エキストラ」が自身の解釈に基づいて表現する「土地を生きる人々の生き方」の実情に接近できる演技と、「俳優」がロズニツアの解釈に基づいて表現する「土地を生きる人々の生き方」演技から『ドンバス』が構成されていることは、『ドンバス』がドキュメンタリー映画とフィクション映画の境界を揺さぶっている要因になり得ると言えるだろう。

最後に『ドンバス』がどの地において誕生したのかを想起したい。『ドンバス』は、ヨーロッパ最大の鉄鉱石採掘センターの一つであるウクライナ東部のクリヴォログ市で撮影されたことが分かる⁵⁸。ドネツクから約300キロ離れた場所に位置する工業都市を撮影場所にした理由についてロズニツアは、「風景や産業形態、人口がドンバスに似ている」からだ⁵⁹と述べている。もちろん、その理由に誤りはないのだろうが、撮影時期となった2014年以降、現実的にドンバスで撮影をすることには安全性や実現可能性の観点から困難が伴ったと考えられる。当時の情勢が『ドンバス』の撮影場所をドンバスでない場所にさせたこともまた、ドンバスで起こった出来事がドンバスではない他の地で描かれているという点において、『ドンバス』を鑑賞者に対しドキュメンタリーとフィクションの境界線を問う映画として機能させているのではないだろうか。

参考文献

浅沼圭司 (1990)、『映画のためにII』白馬書房。

有田浩介 (2022)、『ドンバス公式ガイドブック』サニーフィルム。

アレクサンドラ・グージョン (2022)、『ウクライナ現代史——独立後30年とロシア侵攻』(鳥取絹子、原著は2022年発行) 河出書房新社。

合六強 (2020)、「長期化するウクライナ危機と米欧の対応」『国際安全保障』48(3)、32-50

ページ。

- 斎藤元秀 (2017)、「クリミア半島併合の中露関係」『法学新報』123(7)、383-410 ページ。
- 嶋崎史崇 (2022)、「映画に学ぶウクライナ侵攻の前史 特に『ウクライナ・オン・ファイヤー』と『リヴィーリング・ウクライナ』を巡って」『人文×社会』2(6)、49-86 ページ。
- 塩原俊彦 (2022)、『ウクライナ 3.0——米国・NATO の代理戦争の裏側』社会評論社。
- 下斗米伸夫 (2014)、「ウクライナをめぐるロシアの政治エリート (1992-2014)」『ロシア・東欧研究』2014(43)、21-42 ページ。
- 藤森信吉 (2018)、「ドンバス地域—政治・経済変動の震源地」(服部倫卓、原田義也 (2018) 『ウクライナを知るための 60 章』明石書店)、57-61 ページ。
- 藤森信吉 (2018)、「ドンバス紛争—「ドンバス人民の自衛」か「ロシアの侵略」か」(服部倫卓、原田義也 (2018) 『ウクライナを知るための 60 章』明石書店)、293-296 ページ。
- ベラ・バラージュ (1992)、『映画の理論』(佐々木基一、原著の発行年不明) 學藝書林。
- 松里公孝 (2018)、「ユーロマイダン革命とクリミア—内部から見たクリミア併合の真相」(服部倫卓、原田義也 (2018) 『ウクライナを知るための 60 章』明石書店)、301-305 ページ。
- 村井源、川島隆徳 (2012)、「総合芸術の批評における批評対象の特徴-映画と演劇の批評の計量的比較」『情報知識学会誌』22 (3)、203-222 ページ。
- Дневник Євромайдана.(2014), *Революция глазами журналиста «Репортера»*. Киев: Саммит-Книга.

[追記]

本論文の執筆にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、慶應義塾大学法学部教授熊野谷葉子先生に深謝致します。人文科学研究会の皆様にも、本研究の遂行にあたり多大なご助言、ご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。

¹ サニーフィルム、「ドンバス」、<https://www.sunny-film.com/donbass>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

² 前掲に同じ

³ 東ヨーロッパの中でも、とりわけウクライナとベラルーシを専門としパリ政治学院で教員を務める 1972 年生まれの政治学者である[Goujon, 2022: 208]。

⁴ 認定 N P O 法人 2 1 世紀構想研究会 (2022)、「元ウクライナ大使が語るウクライナ戦争の深層 (中)」2022 年 5 月 23 日、<https://kosoken.org/uncategorized/%E5%85%83%E3%82%A6%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%8A%E5%A4%A7%E4%BD%BF%E3%81%8C%E8%AA%9E%E3%82%8B%E3%82%A6%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%8A%E6%8>

8%A6%E4%BA%89%E3%81%AE%E6%B7%B1%E5%B1%A4%EF%BC%88/、最終アクセス 2023 年 1 月 5 日

⁵ 松里公孝 (2022)、「ロシアのウクライナ侵攻 第 1 章：ウクライナ危機の起源 歴史、安全保障、地域の特性」2022 年 5 月 13 日、

<https://www.nira.or.jp/paper/report032205.pdf>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

⁶ 前掲と同じ

⁷ 前掲と同じ

⁸ 前掲と同じ

⁹ 「ロシアの春」の名で知られるこのデモ活動では、一部の暴徒が公共施設の制御を狙い、2014 年 4 月にはドネツクの市庁舎が占拠された[Goujon, 2022: 98]。

¹⁰ 必ずしも全ての戦闘が終戦したわけではなく、ミンスク合意が締結された後も一部戦闘は続いた[斎藤、2017: 403-404]

¹¹ Антон Долин の YouTube チャンネル「Радио Долин」に 2022 年 3 月 25 日に更新された«Российская Федерация — преемница бесправия». Интервью Сергея Лозницы 内で言及された。尚、当該映像は以下のリンク内の 2 分 18 秒から始まる。

<https://www.youtube.com/watch?v=Y3oRHEnMLcs>、最終アクセス 2022 年 12 月 28 日

¹² РИА НОВОСТИ (2014)「Сергей Лозница. Биография」2014 年 9 月 5 日、

<https://ria.ru/20140905/1022744883.html>、最終アクセス 2022 年 12 月 28 日

¹³ 前掲 12 に同じ

¹⁴ 読売新聞オンライン (2022)、「ウクライナ首都、キエフから「キーウ」に変更…チェルノブイリは「チョルノービリ」に」2022 年 4 月 1 日、

<https://www.yomiuri.co.jp/politics/20220331-OYT1T50239/>、最終アクセス 2022 年 12 月 28 日

¹⁵ 日経ビジネス (2022)「ウクライナで進むロシア語離れ」2022 年 9 月 6 日、

<https://business.nikkei.com/atcl/NBD/19/world/00510/>、最終アクセス 2022 年 12 月 28 日

¹⁶ ロズニツァが 2022 年 2 月 27 日に Facebook に投稿した声明である。Лозница, Сергей. Facebook(<https://www.facebook.com/>). 2022 年 2 月 27 日、“The war which Russia waged on Ukraine is an act of suicidal madness...”、最終アクセス 2023 年 2 月 2 日。

¹⁷ Cinéma du Réel「SERGEI LOZNITSA'S PUBLIC STATEMENT」、

<https://www.cinemadureel.org/en/sergei-loznitsas-public-statement/>、最終アクセス 2023 年 2 月 2 日

¹⁸ 前掲 16 に同じ

¹⁹ 前掲 17 に同じ

²⁰ Christian Zilko「Sergei Loznitsa, Director Who Stood with Russian Filmmakers, Expelled from Ukrainian Film Academy」2022 年 5 月 19 日、

<https://www.indiewire.com/2022/03/sergei-loznitsa-expelled-from-ukrainian-film->

academy-1234709596/、最終アクセス 2022 年 12 月 27 日

²¹ 前掲 12 に同じ

²² セルゲイ・ロズニツァ公式 HP、<https://loznitsa.com/movie/donbass>、最終アクセス 2022 年 12 月 28 日

²³ 前掲に同じ

²⁴ 前掲に同じ

²⁵ 前掲 1 に同じ

²⁶ 前掲 10 に同じ

²⁷ UKRINFORM 「Donbass movie by Loznitsa opens Un Certain Regard at Cannes」、2018 年 10 月 5 日、<https://www.ukrinform.net/rubric-society/2457502-donbass-movie-by-loznitsa-opens-un-certain-regard-at-cannes.html>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

²⁸ 前掲に同じ

²⁹ 前掲に同じ

³⁰ Caryn James 「Donbass: The Ukrainian satire that's too real」、2022 年 4 月 8 日、<https://www.bbc.com/culture/article/20220401-donbass-the-ukrainian-satire-thats-too-real>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

³¹ KLONDIKE 「KLONDIKE A FILM BY MARYNA ER GORBACH」

<https://klondikemovie.com/>、最終アクセス 2023 年 2 月 1 日

³² TheMovieDateBase 「Donbass」、

https://www.imdb.com/title/tt8282042/?ref_=nv_sr_srsrg_0、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

³³ 長周新聞「ドキュメンタリー『ドンバス 2016』 監督 アンヌ＝ロール・ボネル」、2022 年 4 月 18 日、<https://www.chosyu-journal.jp/review/23294>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

³⁴ YouTube チャンネル「マキシム」に 2022 年 4 月 8 日に更新された「"ドンバス 2016" ドキュメンタリー映画【日本語字幕付き】("Donbass 2016" Documentary by Anne Laure Bonnel subtitles JAPANESE)」、<https://www.youtube.com/watch?v=ln8goeR5Rs4>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

³⁵ WOWOW 「ソルジャーズ ヒーロー・ネバー・ダイ」、

<https://www.wowow.co.jp/detail/112771>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

³⁶ 前掲 14 に同じ

³⁷ 前掲に同じ

³⁸ Владимир Коношевич 「Режиссер фильма «Донбасс» Сергей Лозница: «То, что я описал, — это расчеловечивание, которое там полным ходом происходит）」、2018 年 10 月 18 日、<https://birdinflight.com/ru/kino/20181018-sergej-loznitsa.html>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

³⁹ Денис Тимошенко 「Лозница: Донбасс – явление, которое могло возникнуть на постсоветском пространстве всюду」 2018 年 10 月 18 日、

<https://www.radiosvoboda.org/a/donbass-realii/29545202.html>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

⁴⁰ 前掲と同じ

⁴¹ ロズニツァの発言を直訳すると「スケートリンクに落ちた」という表現になるが、恐らく無意識のうちに戦争に巻き込まれたという状況を示しているものだと考えられる。

⁴² Михайло Штекель 「Мой фильм называли галлюцинацией – Лозница о фильме Донбасс»」、2018 年 7 月 22 日、<https://www.radiosvoboda.org/a/donbass-realii/29375965.html>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

⁴³ 前掲と同じ

⁴⁴ 前掲と同じ

⁴⁵ 前掲と同じ

⁴⁶ RUS actors.ru 「Актеры советского и российского кино」、http://rusactors.ru/ya/yatsenko_t/、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

⁴⁷ КИНО-ТЕАТР.РУ 「БОРИС КАМОРЗИН」、<https://www.kino-teatr.ru/kino/acter/m/ros/1829/bio/>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

⁴⁸ 前掲 14 に同じ

⁴⁹ 前掲 14 に同じ

⁵⁰ 前掲 14 に同じ

⁵¹ 前掲 14 に同じ

⁵² 前掲 32 に同じ

⁵³ 前掲 32 に同じ

⁵⁴ 前掲 32 に同じ

⁵⁵ 前掲 32 に同じ

⁵⁶ 前掲 32 に同じ

⁵⁷ 前掲 28 に同じ

⁵⁸ Charlotte Pavard 「Donbass as seen by Sergei Loznitsa」、2020 年 12 月 18 日、<https://www.festival-cannes.com/en/75-éditions/retrospective/2018/actualites/articles/donbass-as-seen-by-sergei-loznitsa>、最終アクセス 2023 年 1 月 30 日

⁵⁹ 前掲と同じ